

四月一日はエイプリルフールだ。罪のない嘘、洒落たトリックでスマートに友人を騙した記憶はないが、ヤラレたと言う覚えもない。四月一日、国分町のこむらさき店が空っぽになった…。

厨房機器も、食券の自販機も、椅子もテーブルも、寸胴も盛り付け台も、全てが店から運び出された。もうこの場所で営業をすることは二度とない…。この状況、誰か嘘だと言ってはくれないか…。

一九八一年二月十八日こむらさきラーメンを開店し、この二月にまる三十周年を迎えたばかりだった。だから三十年と四十一日。今でこそラーメン屋のオヤジだが開店した頃は二十五歳の青年だった。チャレンジ精神の塊みたいな二十五歳の青年には、旦那の夢に相乗りし、一緒に生きていくことを誓ったやはり昭和三十年生まれの嫁がいた。結婚式から二週間での開店だった。

開店してまもなく、ルビーの指輪と言う歌が流行った。その歌を厨房にぶら下げた小さなラジオで麺を茹でながら聴いた。その頃はまだ九州ラーメンの専門店で、毎日の売り上げは三万円前後だった…。嫁はラーメン屋だけでは支払いの金が足りないで時間外に余所でパートをして支えてくれていた。一年以上したある日、一番町で祭りかなにかがあっつていつになく忙しい日があった。あとかたつけの後レジを集計してみると、初めて売り上げが十万円を超えていた。夫婦で手を取り合い喜び、スタッフとビールで乾杯もした…今でもこの晩の事は忘れられない。十年後のバブル時代には一日で百万円を売り上げる事もあったが、この晩の嬉しさには比べる事も出来なかった。

三十年の間にはいろんな事が起こった。サザンのメンバー全員が一度に食べに来たりもした。店内は收拾が付かなかった。開店から四年目に九州ラーメンを天下一品に切りかえた。寒い夏があり米が足りない年もあった。夫婦は二人の娘を授かった…。バブルの時期の国分町は本当に華やかだったが、警察沙汰も沢山あった。日韓ワールドカップが仙台に来た時は、サッカー選手も食べに来た。井上陽水も来たり、相撲の関取も来たり。店はいっしか有名になり、よく来た学生さんは家族を持ち、子供を連れて食べに来るようになった。昭和が平成に変わったり、創生期の学生アルバイトが大臣の諮問機関のメンバーに出世したりもしていた。

三十年と二十一日目、二〇一二年三月十一日、営業中に激しく大地が揺れた。人類史上四番目と言うマグニチュード9の地震がおきた。こむらさきの入っているパーキングビルの損壊は大きかった…。あちこちで鉄柱が曲がり、赤紙が貼られた。ビルのオーナーはもう建て替えししないと判断した。

こうして三十年の店が空っぽになった…。国分町の人達へ別れの挨拶さえする余裕もなく、出ていく…。別れはいつも突然で、まだこの出来事を感情が消化できていない…。

しかし、最後に言うべき言葉は三十年前から決まっていたのかも知れない。

『この店に食べに来て下さった全てのお客様、本当にありがとうございました。』

チャンスがあればまたこの町で泣いたり笑ったりさせてください。千松島パーキングの皆さん、隣の支那そば屋さん、清掃公社の皆さん、国分町交番のお巡りさん、こむらさきに関わりを持った全ての皆さん、本当にありがとうございました。